

## 研究又は普及活動の成果を記載した書類

事業名 富山県「呉東」「呉西」地域区分の成立過程に関する文献史学的研究

### 【主な先行研究】

\* 廣瀬誠「呉東呉西」(富山新聞社『富山県大百科事典 上巻』1976年) 310頁  
「呉東・呉西の用語は地理学者が1926(昭和元)年ごろから使用し、それが一般化したもの。(中略)藩政時代は加賀藩領・富山藩領で区分したため、呉羽山で東西を分割する概念は無かった」

\* 須山盛彰「呉東呉西」(北日本新聞社『富山大百科事典 上巻』1994年) 674頁  
「富山平野のほぼ中央に突き出た呉羽丘陵によって東西に分けられる地域の呼称。いつごろから使用されたかは明らかではないが、比較的新しく昭和の初めごろからのようである。(中略)呉東呉西の対立意識が異常に高まった時期もあった。」

\* 廣瀬誠『神通川と呉羽丘陵』(桂書房、2003年) 27～29頁

藩政初期には呉羽山よりも神通川をもって越中を二分する考え「川西三郡」のち、富山藩領・加賀藩領という観念が強くなって、川西の語もあまり使用されず、呉東呉西という観念も用語も生じなかった

近代になっても明治二十年頃までの越中地誌には呉東・呉西の観念は皆無

呉東・呉西観念の芽生え

明治42年(1909) 富山県『富山県紀要』

「其の余波は婦負・砺波両郡の境上に北走し、以て高岡・富山二大平野を画す」

大正2年(1913) 小柴直矩『呉羽山』

「富山・高岡の茫漠たる大平野を東西に横断す」

昭和4年(1929) 富山県小学校長会編『富山県郷土地理』

「呉羽・城山の丘陵は飛騨高原より半島状に平野に突出して呉東平野と呉西平野とに二分する」

このあたりから呉東・呉西の語が用いられたらしい

石井逸太郎さん・市川渡さんなど地理学者の昭和初期の著書・論文

司馬遼太郎が説いた「富山県における関東文化圏と関西文化圏の境界線」

この地理的事実に人々が気づき、自覚し、日常用語にまでしたのは意外に新しい

\* 高山龍太郎「富山県の東西における地域差」(『富大経済論集』52巻3号、2007年) 125頁

95%の人が、富山県が呉東と呉西という呼び名で二分されることを知っており、75%の人が、呉東と呉西の間に全般的な違いがあると考えていた。このように、富山県を東西に分けて把握する認識は、かなり一般的である。しかし、こうした認識枠組みがある一方で、現実の富山県の東西の違いはなくなりつつある。

→2007年段階での様々な呉東呉西の地域差認識を実態調査からあぶり出している

## 【調査所見】

### \* 「呉東呉西」呼称成立の背景

明治時代末期から大正年間に「中越平野を横断・区画する呉羽山」認識の浸透

明治42年(1909) 富山県『富山県紀要』49頁

「中越の平野を東西に横断せる山脈の余端なり」

大正2年(1913) 中川滋治編『富山県園芸要鑑』(富山県農会) 235頁

「呉羽山 富山市の西方十余町にして婦負郡東呉羽村に達す、この地南北に丘陵をなして中越平野を東西に横断せる山脈の余端あり、呉羽山と云う」

大正2年(1913) 富山県農会編『農事視察要覧』

「南北に横はる丘陵を呉羽山と云ふ、所謂中越の平野を東西に横断せる山脈の余端なり」

大正2年(1913) 小柴直矩『呉羽山』1頁

「富山高岡の茫漠たる大平野を東西に横断する名山なり」

大正2年(1913) 富山県協賛会編『富山県案内』244頁

「富山・高岡間の一大平野を東西に横断する一丘陵なり」

大正2年(1913) 富山県協賛会編『富山県写真帖』

「富山・高岡間の一大平野を東西に横断する丘陵なり」

大正2年(1913) 北陸タイムス編『富山県写真帖』2頁

「南より北に走りて越中平野東西に縦断す」

大正11年(1922) 富山県知事官房『富山県勢概要』31頁

「呉羽公園、富山市の郊外に在る一帯の丘陵」

大正15年(1926)『富山県勢概要』53頁

「富山、高岡間の大平野を東西に区画せる一帯の丘陵」

→これが廣瀬誠の「昭和元年ごろ」記述の根拠であろうか？

『県勢概要』でも大正15年までに「平野を横断・区画する呉羽山」認識が定着  
昭和4年には平野を「二分」する丘陵とも

⇒時系列的には「平野を東西に横断」(大正2年以前)から「平野を東西に区画・区分」(大正15年以後)へ

※ただし、富山県全体を分かち境界ではなく、あくまで平野部に限定された捉え方

### \* 昭和に入り、富山県だけでなく全国出版物へも波及

昭和5年(1930)『日本地理風俗大系6・7 中央及北陸編上下』(新光社)98頁

「呉東平野と呉西平野に二分する」

昭和6年(1931) 鉄道省『日本案内記3 中部篇』353頁

「富山・高岡間の大平野を東西に区切る丘陵」

### \* 富山平野を分かち「呉東呉西」という言葉の登場 昭和4年(1929)

昭和4年(1929)3月 富山県小学校長会編『富山県郷土地理』

14頁「是の丘陵が越中平野を二分し、古来文化、政治、経済等に対する自然の境界

線で あった事は我が越中史を繙く人のよく知る処である。過去ばかりではない現在に於てもいくらか習俗や気質、言語、経済等に於て差異あることを認めるのである」

⇒文化的境界としての着目がすでに見られる

16頁「呉羽山以東の平野と河川」

22頁「呉山以西の平野と河川」

52～61頁「居住地理学上より見たる越中平野」

呉西平野、呉東平野、黒部川扇状地及山岳丘陵地域として区別

昭和四年三月二十八日稿 理学士石井逸太郎

石井逸太郎「居住地理学上より見たる越中平野」（『地理学評論』6巻7号、1930年）に修正のうえ再掲

3頁「呉羽丘陵以西の呉西平野（中略）当時は呉西平野が遥かに呉東平野より発達して居た」

6頁「呉西、呉東、黒部川扇状地の順序で、人口数が漸減して行く」

※ 石井逸太郎：1889年生～1955年没、地学者

大正14年（1925）に富山高等学校へ着任・地理学を担当

昭和6年（1931）富山地学会を創始・主宰

昭和22年に天皇北陸巡幸の折に「富山県の地理」進講

⇒呉東平野（≠呉東）に黒部川扇状地が含まれない点に注意すべき

※石井は終生この認識を保持

石井逸太郎『富山県新誌』（日本書院、1949年）71頁

「越中平野を呉東、呉西の二大平野とする外に黒部川扇状地と氷見海岸平野との四地理区に区分するのが当を得ていると思う」

富山県の東西を分かち地域呼称としては未確立

昭和6年（1931）

富山県学務部『富山県史跡名勝天然記念物調査報告 第拾壹輯』

呉羽山古墳横穴群 調査委員 大村正之

1頁「越中国を呉山以東、呉山以西と区分する目標となる重要なる丘陵地」

10頁「今や呉山以東、呉山以西の越中上代文化繁榮の二大中心地を推定する事の安當なる考察なりと信ずるのである。」

⇒越中国全体を分かち指標、平野部に限定されていない

とはいえ、このような捉え方は少数派

呉東平野・呉西平野と呼ばれるとおり、原則的には平野の呼称

昭和7年（1932）村上宗一郎『郷土の山水 富山縣呉東編』（光洋社）

「呉東」＝「呉羽山中心以東」

「富山・高岡間大平野を東西に区画せる一丘陵である」

「第二編 富山縣呉西編郷土の山水 目下編纂中近々出版」⇒実現せず？

村上宗一郎（陽岳）：富山市石倉町27在住 光洋社の代表

昭和11年（1936）富山県『富山県の産業と港湾』

3頁「呉羽丘陵を以て平野は自ら東西に二分され呉東・呉西と区別す」

10頁「今縣下の綠色凝灰岩統を通覧するに、呉山以東に於ては驚期岩層に隣り弧狀發達を示し、二一三〇〇米の丘陵の背後に一段と高い六一七〇〇米の山地を構成し、又呉山以西にありては、庄川堰堤湛水區域を挟んで東に牛岳、西に高清水の山塊等を起し、」

68～69頁「高岡電燈株式会社（中略）富山県下に一市十二町七十四ヶ村並に石川縣羽咋郡の六町三十七ヶ村を有し、呉山以西に於ける一大電氣會社となり業界稀に見る好成績を繋げてゐる。」

昭和11年（1936）富山県『富山県政史 第1巻』93頁

「呉羽・城山の呉服丘陵は、飛騨高原から半島狀に平野に突出して、呉東平野と呉西平野とに二分してゐる」※『富山県郷土地理』と酷似

昭和11年（1936）

小柴直矩「伝説の立山と史蹟の呉羽山」（『都市公論』19巻5号）130頁

「越中の大平野を東西に二分する一丘陵」

\*戦前・戦中期に研究者（とりわけ地理学）の間で「呉西平野・呉東平野」の定着  
昭和8年（1933）

耕崎正男『日本郷土景觀通説』（古今書院）

「呉羽丘陵によって東西に分たれ、其の景觀を異にしてある」

宮崎健三「放生津瀉（越の瀉）附近の景觀」（『地理学評論』9巻12号）22頁

「放生津瀉は呉西平野の海岸の西端近くに位置する瀉湖で現在の地形図では、西は新湊町から堀岡新に到る極めて狭小なものに過ぎない。」

昭和9年（1934）

市川渡「越中呉羽山以東の聚落について」（『地理学評論』10巻4号）

2頁「呉羽山以東とは、越中中部平野を意味する」

⇒呉羽山で分類する意識

昭和12年（1937）

木倉豊信「東大寺墾田地を主としたる呉西平野の古代地理（上）」（『富山教育』280号）5頁「呉西平野（射水・砺波両郡）」

※木倉豊信：1906年生～67没、砺波生まれの郷土史家

昭和16年（1941）

市川渡「越中平野に於ける地形区分と村落景觀」（『地理学評論』17巻2号）94頁

※石井論文の引用「呉西、呉東、黒部川扇狀地の順に人口数が漸減して行く」

市川渡：1902年生～86年没、地質学者

昭和6年（1931）に高岡高等女学校教諭

のち富山県師範学校で14年間地理学を講じる（『富山大百科事典』）

昭和22年(1947)10月31日 石井逸太郎「御進講 富山縣の地誌」(『富山縣新誌』日本書院、1949年)21頁

越中平野の中央に横たはる呉羽丘陵は、洪積層から成る旧扇状地の残骸でありまして、之がある為に平野は二分され、東は呉東平野、西は呉西平野といつて居ります。僅かに百米内外の低い丘陵ではありますが、之が越中平野を二分して、人文上、東は富山、西は高岡市が中心となつて居ります。

石井逸太郎『富山縣新誌』(日本書院、1949年)

70頁「呉羽丘陵で二分された越中平野は呉東、呉西の二つの平野となる」

⇒「ごさい」と読んだ呉西

92頁「富山市は県政の中心で、且つ高岡と並んで経済的中心であるが、呉羽丘陵がこの平野を二分して二大都市を作り、以て勢力を二分したものと考えるべきである。」

\*地理学者の間における浸透と同時期に富山県政界でも「呉東呉西」区分の登場

昭和5年(1930)3月6日 富山県庁舎焼失

移転問題をめぐる呉東・呉西 地理区分に政治的意味合いが付加される

『富山日報』1930.3.11 夕刊、『高岡新報』1930.3.11 呉西への適当な地への運動決議

『富山日報』1930.3.12 夕刊、1930.3.13 呉西移転への賛同を求める

『高岡新報』1930.3.13 呉西移転実現を決議

『富山日報』1930.3.13「郡市共同の檄文 呉西町村方面へ発した」

県庁を呉山以西の地に移そうとする射水郡町村長会及高岡市は、呉西町村及県会議員へ宛て発送したる檄文左の如し

本県の主脳機関は治県以来すべて五山以東に偏重し、五山以西にめぐまれざるは、はなはだ遺憾なり、本県の関門を握する伏木港はいまや全国有数の良港として日とともに進展し、物資の集散たるや実に裏日本に冠絶せんとす、これが関門を圍繞する呉山以西は地の利を占め、逐年発展し、実に本県文化ならびに産業の中枢をなすにいたり、然るに本県未開時代の余弊いまだ去らず、県主脳機関はあげて呉東に独占せられ、わが呉西には一機関だもこれなきをもって、過般県庁舎の災禍に対し、経済困難の今日財政上県民挙げて実に傷心のいたりにたへざるところなりと雖も、わが呉西にとりてはこの機会を失することなく従来旧弊を打破し、如上の事実にかんがみ、先づ県庁舎の所在地をわが呉西に転じ、円滑なる県政発達のためにこの地理的使命をまっとうせんことを熱望するものなり、此所をもって去る三月十日開催せる射水郡町村長会は満場一致県庁舎を呉西に移転新築を期すべく議決し、直に高岡市の熱烈なる賛同と協力を得、これが実現に対し万難を排除し猛進せんとす、それ大方諸彦この真純なる運動に賛同せられ、最善の努力をもって所期の目的達成に尽瘁せられんことを敢て檄す、

昭和五年三月十一日

高岡市長

射水郡町村長会

『富山日報』1930.3.18 夕刊、1930.3.19、1930.3.19 夕刊『高岡新報』1930.3.19 呉西の一市四郡代表委員会開催、移転をめぐる呉西内での温度差

『富山日報』1930.4.9 夕刊「県庁移転期成同盟会 発会式挙行」

本県庁移転期成同盟会発会式は九日午後二時から高岡市役所に於て開会、出席者は呉山以西市郡町村長、高岡市会議員等で、左記順序に依り式を挙げた。

第一条、本会は富山県庁移転期成同盟会と称す、

第二条、本会は富山県庁を高岡市に移転せしむるを以て目的とす、

第三条、本会は高岡市及射水、氷見、東砺波、西砺波四郡の各町村を以て組織し、其の事務所を高岡市役所内に置く、

第四条、本会に左の役員を置く、

会長、幹事一郡市五名以内、評議員呉山以西各町村長、高岡市会議員

第五条、会長は高岡市長を以て之に充て、幹事は高岡市及各郡町村長会の推薦者を以て之に充つ、

第六条、本会に顧問並相談役を置く、顧問は本県選出貴族院議員、衆議院議員、及県会議員中より、相談役は地方名望家中より之を推戴す、

第七条、本会の経費は寄付金並関係市町村の拠出に依る、

第八条、本会に必要な細則は会長に於て之を定む、

『富山日報』1930.5.5 夕刊 射水郡内の堀岡・海老江・本江・七美の4か村の村長から「富山県庁呉山以西移転期成同盟会の主旨には賛成なるも経費の負担支出には絶対に反対」の書面が送られる

\* 昭和戦前期 「呉東呉西」の地域区分に基づく県内組織の成立  
平野呼称から地域呼称への変化

昭和10年（1935）

「富山呉西聯盟醫会結成」「高岡市外四郡の所謂呉西医師団」

〔『医海時報』2145号、2051頁〕

昭和14年（1939）

「富山市総曲輪呉東皮革工業組合幹事 高石由一」

〔海電産業振興会編『産業視察報告集』目次頁〕

昭和14年（1939）6月

「富山呉西三等局長会」「富山呉東三等局長会」が誕生

〔中島正文編『富山県通信沿革史』富山呉西特定局長会、1942年。137～146頁〕

昭和17年（1942）4月

「富山県呉東洗染クリーニング商業組合」の第一回通常総会

〔『日本洗濯界』17巻5号、17～18頁〕

⇒昭和戦前期（昭和10年代）が、地域呼称としての「呉東呉西」の萌芽期といえる

→戦後そのような「呉東呉西」区分に基づく組織成立の傾向はいつそう強まっていく  
昭和21年(1946)

日本共産党富山県地方委員会 呉東・呉西の両地区委員会は、その後さらに数か月を  
経て結成された。[瓜生俊教『富山県警察史 下巻』(1965年)395頁]

\*戦後 呉東呉西対立の象徴的事件 富山大学経済学部誘致問題

昭和27年(1952) 富山大学経済学部をめぐる富山・高岡両市の誘致運動

「(中略) 呉西対呉東の対立感情にまで火がつく状況を呈した」『富山県史 通史編VII現代』(1983年) p541

「呉東呉西の有難くない戦いにはまことに閉口したものでした」『富山大学十五年史』(1964年) 309頁・吉田勇「思い出の富山」

\*地元の知識人・文化人にも「呉東呉西」呼称の波及

昭和34年(1959) 堀田善衛「良平と重治」(堀田『文学的断面』河出書房新社、1964年) 82頁

「越中のまんなかには呉羽山という山があり、その西と東とを呉東、呉西とわけているが、越前からこの呉西までは、どうやらひとつのユニットをなしていないことはない、より大ざっぱに言うならば、歴史的には京都文化圏のなかにそれが明らかに入っている、という気持ちがある。」

→伏木生まれの堀田善衛も呉東呉西の地理区分を常識のごとく受け入れていた

昭和51年(1976) 源氏鶏太『夏雲冬雲 私の履歴書』(日本経済新聞社)

31頁「富山に、呉東、呉西、という言葉があった。富山市の郊外に高さ数十メートルの呉羽山があって、そこから西と東で区分されていた。(中略) 富山県でも呉西は、京都、加賀に近く、呉東にくらべるとより文化的であるとされていた」

\*高度経済成長期 富山県域を二分する地域呼称(ネガティブ面を含む)として確立

昭和31年(1956)『キネマ旬報』105頁

「呉東と呉西、つまり東の富山市と西の高岡市が何かにつけて競い合うのは昔からの宿命的対立ともいえる。これは興行界においてもその例をまぬかれぬ。」

昭和31年(1956)『岩波写真文庫210 富山県 新風土記』(岩波書店)

18~19頁

「この平野は、飛騨高原から北に延びる高さ百米内外の呉羽丘陵によって東西に二分され、黒部、常願寺、神通の流域である呉東平野(富山平野)は富山市をその中心とし、庄川、小矢部川の流れる呉西平野(砺波平野)は高岡市を中心としている。」

昭和42年(1967) 青野壽郎『日本地誌 第10巻』(二宮書店)

14頁「富山平野はほぼ中央に突出する呉羽丘陵によって呉東平野と呉西平野に二分される」

昭和45年(1970)『講談社版 日本の文化地理 第七巻 新潟・富山・石川・福井』  
140頁「ながらく県民は呉東地方の中心都市富山と呉西地方の中心高岡市を対置して、ライバル視してきた」

→やはり「ごさい」と読む。これらの言説は、その一例にすぎない。富山市と高岡市の対立意識が呉東呉西の区分法を助長した側面は否めない

昭和45年(1970)坂井誠一『富山県の歴史』(山川出版社)143頁

「富山県人はよく呉東・呉西という言葉をつかう。(中略)呉東と呉西では言葉のニュアンスから風俗・習慣にいたるまで、注意ぶかく観察すると、かなりの相違があることを発見する」

\*司馬遼太郎が注目、地元の地名辞典に明記され定着する 様々な境界としての呉羽山  
昭和49年(1974)司馬遼太郎「立山の御師」『街道をゆく4』167頁

「野の中央に、呉羽山という低く細ながいナマコ形の丘陵が隆起しており、この平野の人文を東西にわけている。「呉東・呉西」などと、富山県ではいう。町でいえば富山市や魚津市は呉東であり、高岡市は呉西である。この最高部が145メートルでしかないひくい丘陵が、人文的に大きな意味をもつのは、これを境界線にして富山県における関東文化圏と関西文化圏を大きく二つにわけていることである。東西は方言もちがい、生活意識や商売の仕方などもすこしずつちがっている。人文的な分水嶺を県内にもつというのは、他の府県にはない。(中略)京・大阪の人文圏というのは、北陸へゆけば越前も加賀をもふくむ。さらに東へゆき、越中平野に入り込むが、しかしこの呉羽山丘陵の西麓をもって北限とするのである。」

昭和51年(1976)廣瀬誠「呉東呉西」(富山新聞社『富山県大百科事典 上巻』)  
310頁「その自然的区分が人文上の種々な相異と一致している」

昭和54年(1979)『角川日本地名大辞典 富山県』37頁

「呉東と呉西では言葉のニュアンスから風俗習慣に至るまで、かなりの相違を発見する。」

『富山県史 通史編Ⅶ現代』(1983年)1107頁

「高度成長以後、両市の勢力関係が大きく変化し、県内における富山市の中心性が拡大し、呉東・呉西の地域区分も意味が薄れてきた」

以上